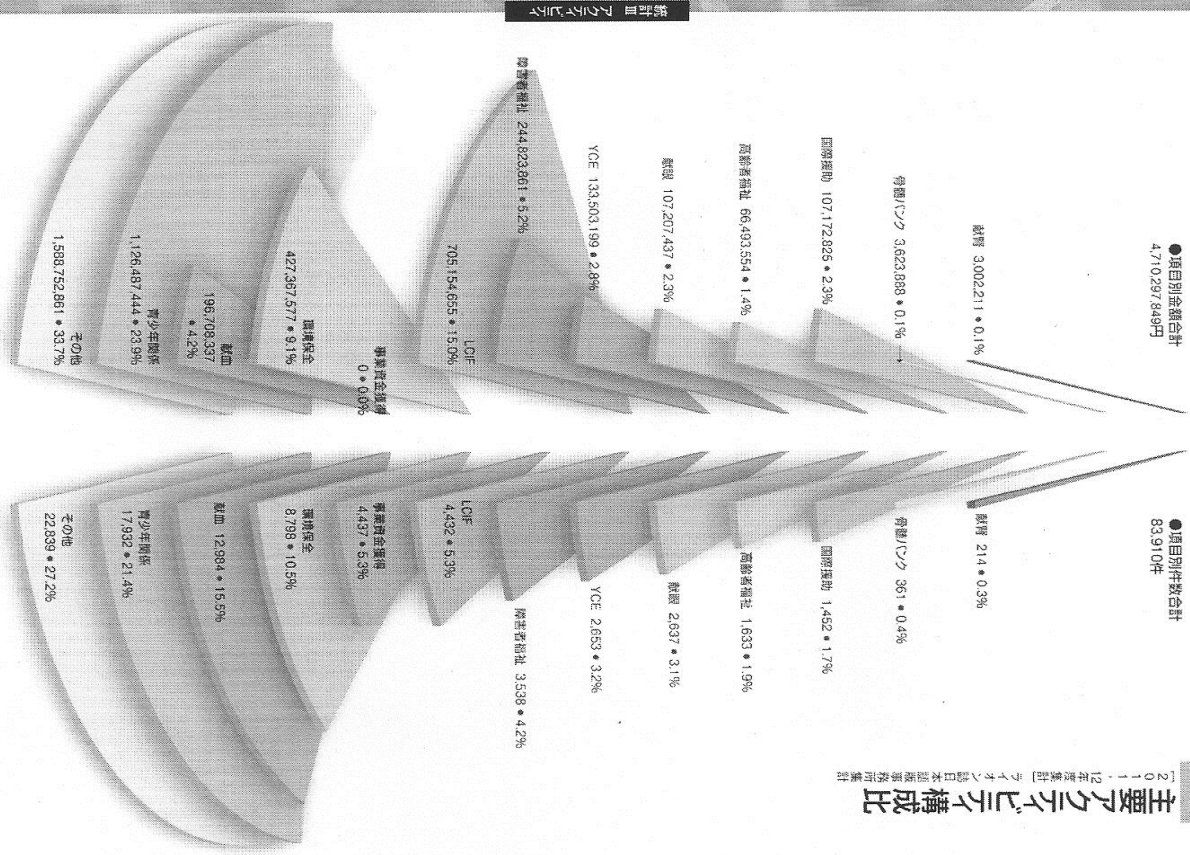


■ライオンズクラブ統計

●項目別金額合計
4,710,297,849円

●項目別件数合計
83,910件

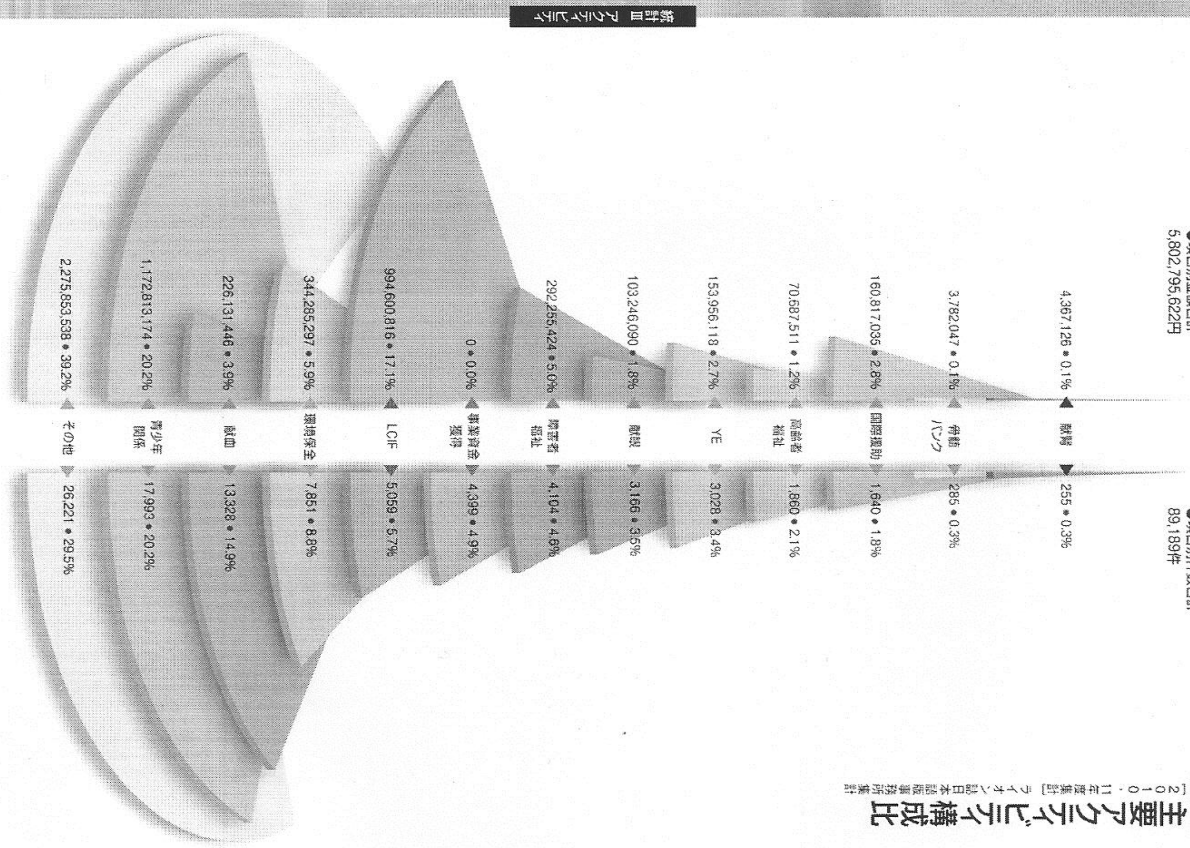


13 LION 2012年10月号

■ライオンズクラブ統計

●項目別金額合計
5,802,795,622円

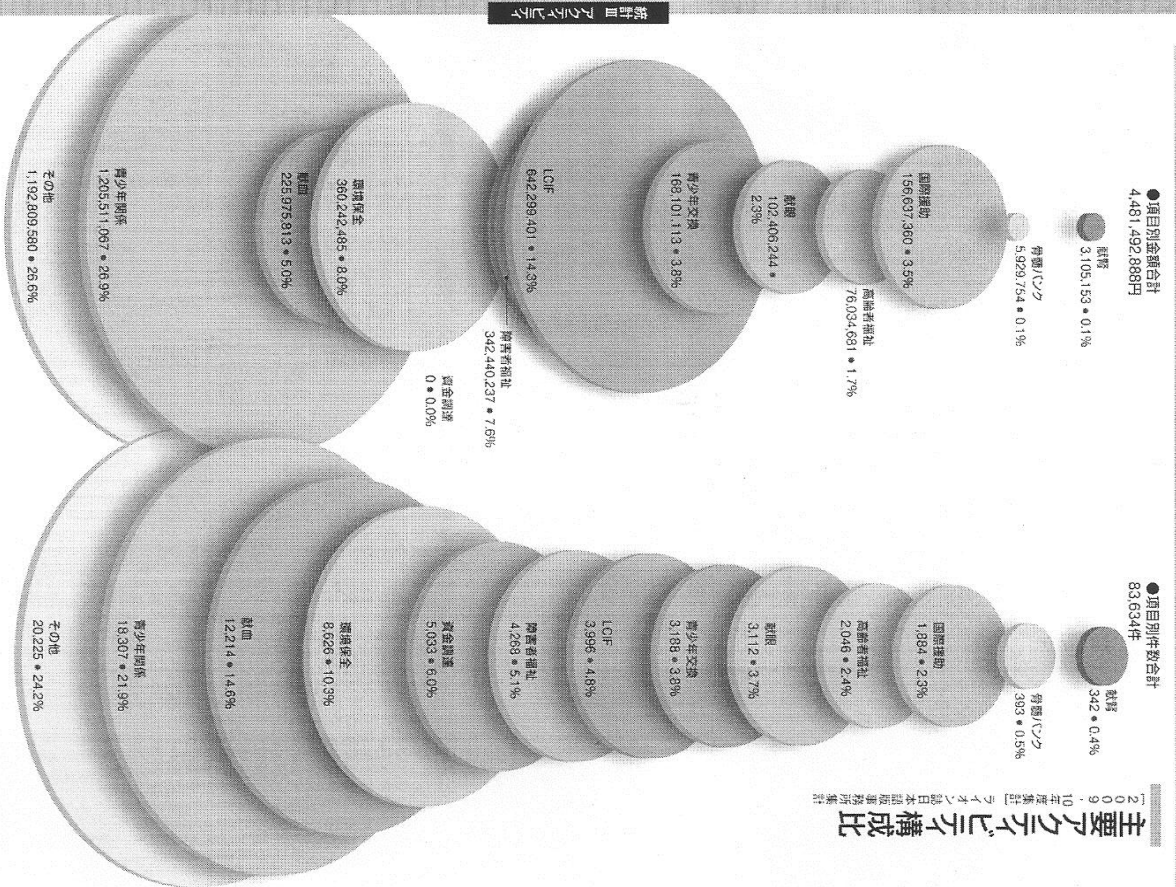
●項目別件数合計
89,139件



11 LION 2011年12月号

主要アライビリティ構成比

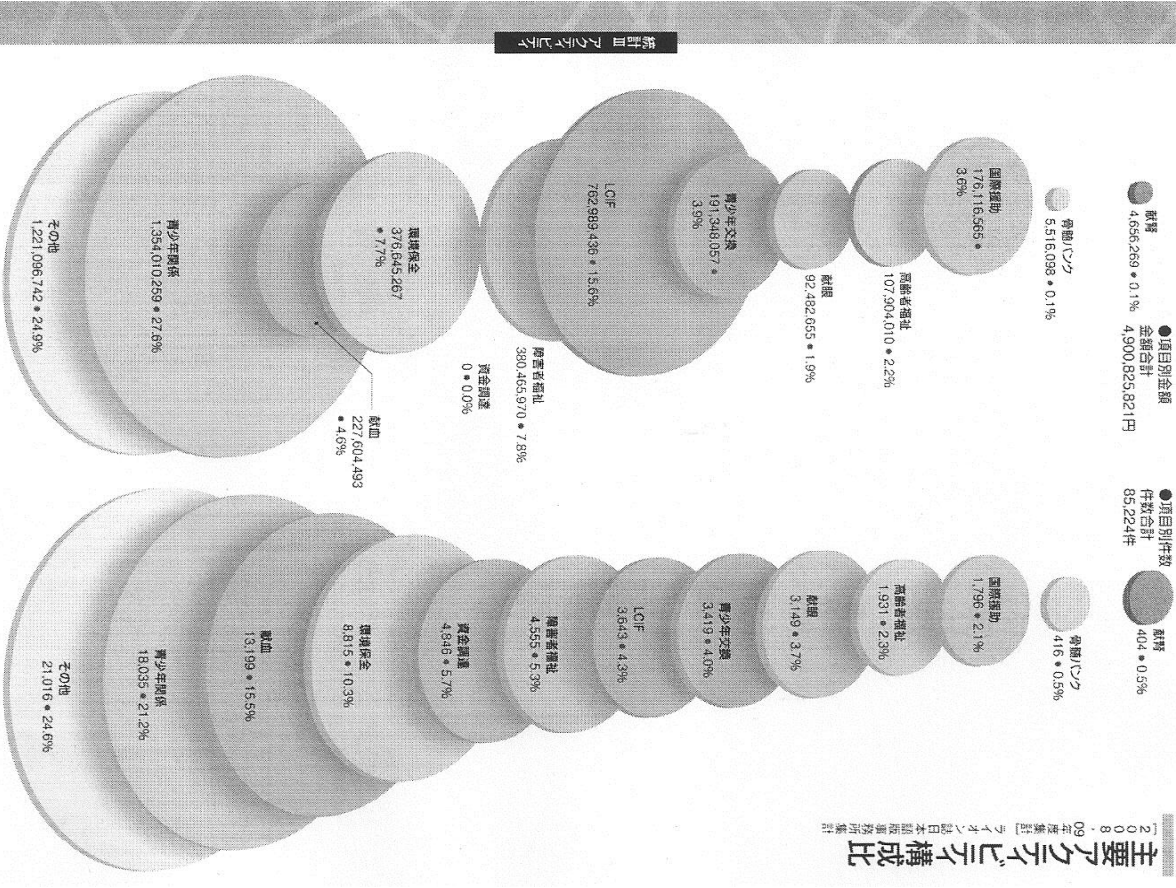
2009 10年度集計ライオンズクラブ日本連盟集計



11 LION 2010年12月号

主要アライビリティ構成比

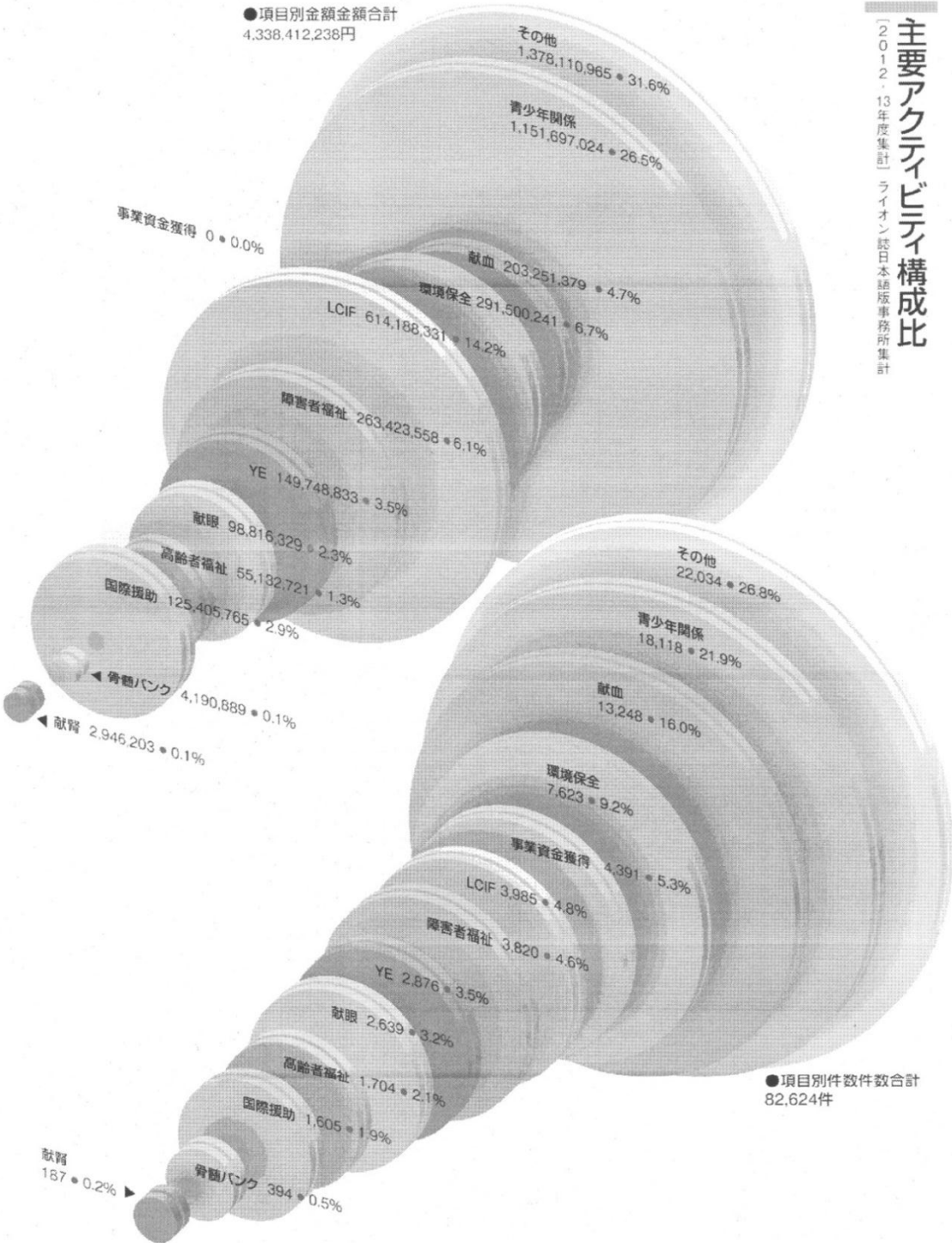
2008 02年度集計ライオンズクラブ日本連盟集計



11 The Lion 2009.12/15

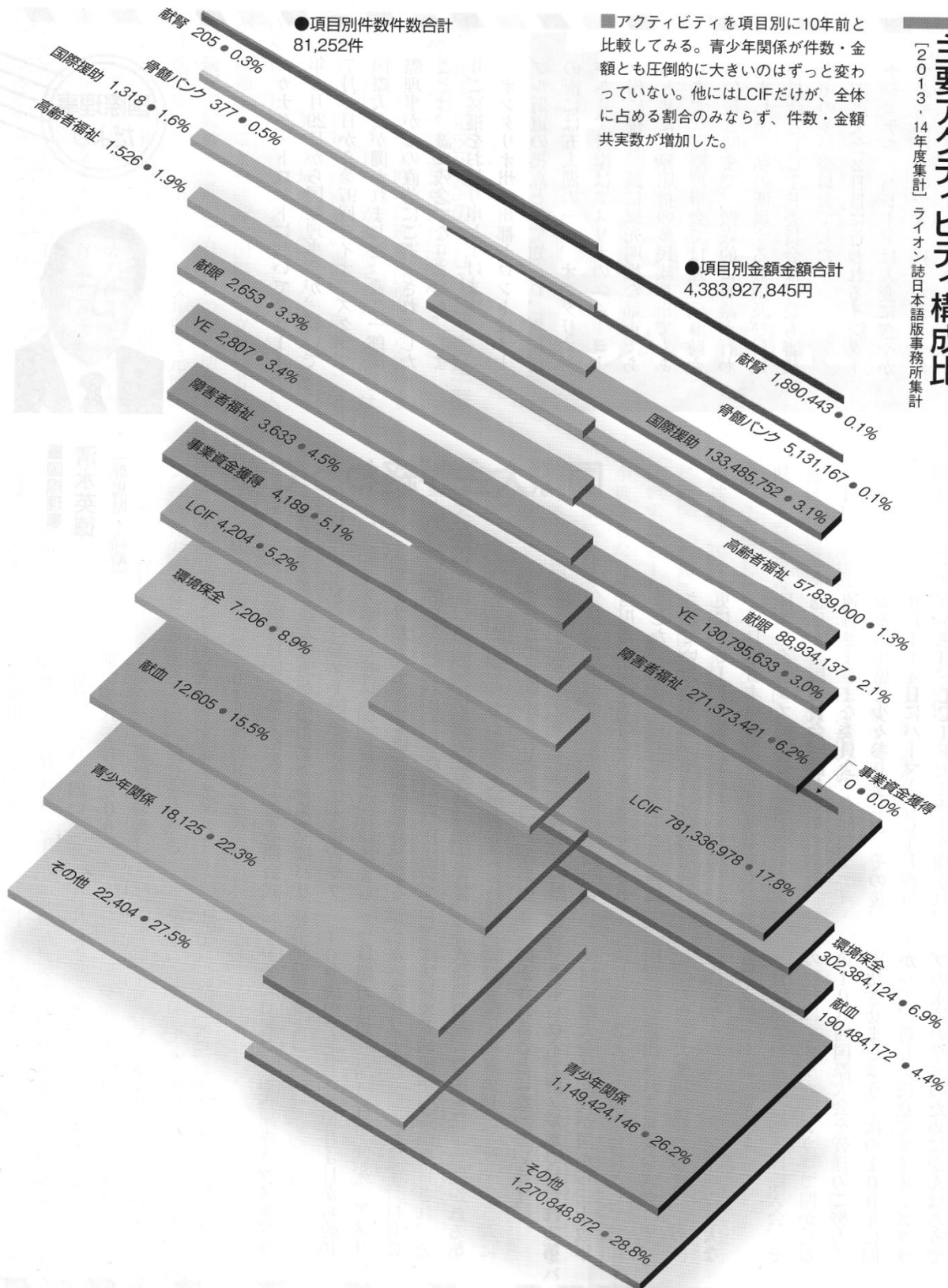
特集：ライオンズクラブ統計

主要アクティビティ構成比
 (2012・13年度集計) ライオン誌日本語版事務所集計



統計Ⅲ アクティビティ

ライオンズクラブ統計



系本英樹
国際事務局長

統計Ⅲ アクティビティ

ライオンズクラブ国際協会 献血資料

献血アクティビティの 2008 年度～2013 年度推移表 7 月～翌年 6 月＝年度

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度
献血アクティビティ件数	13,199	12,214	13,328	12,984	13,248	12,605
年度内構成比	15.5%	14.6%	14.9%	15.5%	16.0%	15.5%
献血使用事業資金	227,604,493	225,975,813	226,131,446	196,708,337	203,251,370	190,484,172
総事業費内構成比	4.6%	5.0%	3.9%	4.2%	4.7%	4.4%
献血数量 (類推) 件数×90%×25 人 ×0.4 (400 cc) =	118,791	109,926	119,952	116,856	119,232	113,444
クラブ数	3,337	3,288	3,257	3,225	3,194	3,151
メンバー数	108,779 人	105,582 人	103,591 人	101,781 人	100,768 人	113,604 人

上記データはライオン誌日本語版より転載した公式データです。

但し、献血数量は、類推となっております。(下記の通りシビアな判断をしております。)
 献血アクティビティ件数の内 10%を献血を伴わない推進キャンペーンとしておりますが、献血を伴わないアクティビティは実質 5%以下で、95%以上が献血を行うアクティビティと推測できます。
 1 回の採血人数を 25 人とみなしておりますが非常に少ないみなし数です。(自クラブでは概ね 40 人前後です。)

事業資金に関して：売血と見なされる事を日本赤十字社が避ける指導を厳しくされている為に、ライオンズクラブとしても、献血者に対しての対価支払いに成らない様に、菓子等提供等に抑え

ておりますので、件数構成比に比べ事業費構成比が少なくなっております。

ライオンズクラブ全メンバーに配送される機関紙に「献血」に関する特集記事が掲載されたライオン誌日本語版 2013 年 10 月号で、ライオンズクラブの奉仕活動に於いて、献血活動が重要な地位を占めているので、全メンバーに正確な情報を再確認させ、活動の活発化を目指した記事。

THEME

大人の社会科見学 献血編

今日も全国のどこかで、ライオンズが
献血への協力を呼び掛けている。命をつなぐ
ために輸血や血液製剤が欠かせない人を
助ける献血。提供された血液はどのように
必要な人の元へ届けられているのか。

日本赤十字社の血液事業の
現場を見学
する。

大阪府・八尾中央ライオンズクラブ
河内音頭まつり大パレードに参加



八尾中央ライオンズクラブ（吉本稔会長／53人）が「八尾河内音頭まつりパレード」に参加するようになって10年。今年は当クラブの河内音頭同好会とライオン・レディーに加え、八尾うぐいす、南大阪みささぎ両クラブの友情出演をバックに総勢60人で挑んだ。

8月28日、先頭にクラブ旗、そしてメイン事業である薬物乱用防止のタスキと横断幕をひっさげ、マスコット・キャラクターのライオンマン、「ダメ。ゼツタイ。」子ちゃんも加えてエントリー。5時20分、いよいよ我がクラブの出番だ。気合いを込めて全員で「ウ

オー」と一声、元気よくパレードに練り出した。今年は東日本被災地復興チャリティー・イベントも兼ねており、参加者3千人、J・C・O Mの生中継もある。躍動感あふれる河内音頭の調べに、自然と八尾の夏が盛り上がる。

約40分の道中に、沿道の観客、知り合いの皆さんから温かい応援の声や拍手を頂き、踊りも一糸乱れず？無事ゴールした。マスコットもたくさんの子どもたちから握手をねだられ、テレビ・クルーにも撮られ大人気だった。実を言うと連日30度を超す猛暑でメンバー誰もが着ぐるみを着るのを尻込

みする中、何と若手メンバーのご子息（中学2年生）が「僕、ライオンズのためやったら『ダメ。ゼツタイ。』子ちゃんをかぶります！」。ライオンマンは事務局員が引き受けてくれ、大いに感謝！ 今回のパレードも大成功を収めることが出来た。

「よかったなあ！」「来年もやりまっせえ！」。この元氣と笑顔が被災地の皆さんに届けばエエなあと思いつつ、「ウィ・サーブ」でビールの乾杯。良い汗をかき、良い気持ちで、良い奉仕が出来たと全員満面の笑みだった。

（設営・PR委員長／野勢昌彦）

福岡県・大牟田中央ライオンズクラブ
大牟田高等学校献血会



日本ライオンズが献血運動を始めて46年。337・A地区は積極的にこれを推進してきた。福岡県内では献血バスと献血ルームで行われ、ライオンズの献血はすべて前者。昨年、一昨年とも、県内の献血バスでの採血全体の4分の1を占めた。

少子高齢化社会により今後は血液製剤を必要とする人が増加する一方、献血可能な年齢層の減少が想定され、より一層の注力が求められている。

今年度は採血基準の改正が施工され、男性は17歳から400ミリットル献血が可能となった。当クラブはこの機会

を捉え、若年層、特に高校生に対する献血の啓発・普及運動を展開していくことにした。

大牟田高等学校は在校生1200有余人を擁し、駅伝、柔道、野球、吹奏楽など各分野で優秀な成績を収めている。同校に申し入れたところ、学校当局もその趣旨を理解し積極的に協力してくださることになった。

第1回献血会を9月6日に実施。爽やかな初秋の日差しの中、9時30分開始から15分間隔、5人単位で献血バスに入り、予定時間通りの午後3時に終了した。受け付け93人、採血者83人。

中でも部活動で活躍している生徒さんが率先して参加してくれうれしく思った。行き届いた学校側の配慮にも会員一同感謝を申し上げた次第である。

第2回は「卒業記念献血会」と銘打って今年2月に予定しており、多数の参加を期待している。

学校当局に次年度に向けて1、2年生を対象とした献血研修会の設定をお願いしたところ、3月に行うことになった。福岡県赤十字血液センターと連絡を取りながら、受講者の啓発と献血の普及に努めていくつもりだ。

（幹事／萬矢勝保）

332-F地区第1部第1分、第2部第1分・第2分(秋田県)

クリスマス献血キャンペーン実施

334-D地区第1部第2分(富山県)

ホクリクサンショウウオのビオトープを守る



第2部の7クラブ(富山セントラル、八尾婦中、富山神通、大山、富山西、富山昭和、富山いきいき)は、新年度当初に開催される恒例のゾーン会長・幹事会で、今年のライオンズ・デーはゾーン合同で奉仕活動に取り組みことを決議した。

富山西ライオンズの田畑裕二会長から「ホクリクサンショウウオ(絶滅危惧種)の生息地が危ない」という情報を提供頂いたことがきっかけとなり、戸田治ゾーン・チェアパーソンの取りまとめの下、日本で唯一、里山を有する動物園・富山市ファミリーパーク内

にあるトンボの沢で、大雨などで堆積した泥の泥上げを行うことになった。当日の10月8日は曇りも寒くもない肉休労働に絶好の天気。7クラブからの選抜メンバー77人がスコップとバケツを手に、疲れも忘れ心地よい汗をかいた。

参加メンバーの感想を紹介しよう。「久しぶりの動物園でルンルン気分で作業を始めた私たちに、後悔はじきにやってきました。が、いつ果てるとも知れぬ作業の中、ドロドロになりながらも、次第に爽快感と童心に返るような懐かしさを感じ始めたのです。そし

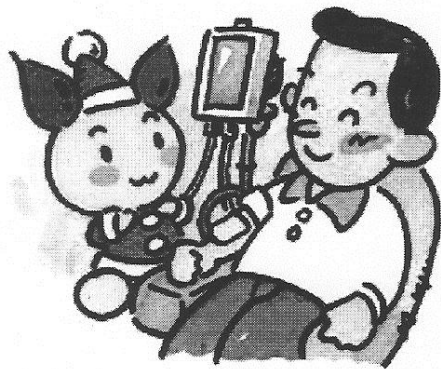
て体感とは、思考を超えて事実を実感することだと気付きました。奉仕も「百聞は一験(経験)に如かず」、体感以外では生まれないことに改めて気付いたことが、何よりも大きな収穫でした。来年はぜひ、この感動を他の人にも味わってもらいたいと思います」

今回のアクティビティは皆の努力があつて、成し遂げることが出来た。キヤビネットの環境事業方針「地域にビオトープを作ろう」にも合致し、市民の憩いの場の環境整備も出来るすばらしい事業となった。

(地区委員/長江正憲)

12月3日、4日の両日、第1部第1部と第2部第1及び第2部の秋田市周辺の16クラブは合同で、JR秋田駅前のアゴラ広場で「クリスマス献血キャンペーン」を実施した。血液が不足する冬場に献血を呼び掛けようというこの企画は1984年から続いており、今回は2日間て99人の市民らが献血してくれた。

県赤十字血液センターによると、県内は少子高齢化の影響などで獲得出来る献血量が減少しているに加え、12月3月は風邪で体調を崩したり、雪でバスが運行出来なかつたりするため更

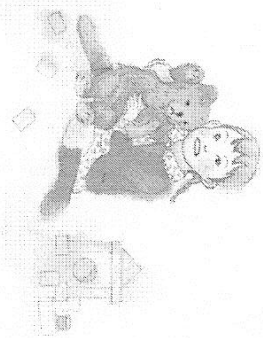


に献血者が減るのだそうだ。1週間当たり約50人分の血液が不足しているという。

我々は献血の看板を掲げて道行く人たちに協力を呼び掛けながらティッシュユベーパーを配り、また採血を終えた方たちには、お礼のお菓子をプレゼントした。

県赤十字血液センターの担当者からは「ライオンズの協力がなければ成り立たない」と感謝されている。血液を必要としている患者さんはクリスマスも病氣と闘い、血液を待っていると聞き、この活動の必要性を強く感じる。これからもより多くの方が献血に協力してくれるよう呼び掛けていきたい。

(秋田中央ライオンズクラブ会長/浜野正)



毛、まっげまでもが抜けた。副作用で白血球や血小板が破壊され、鼻や歯茎からも出血し、食事もものを進らなくなった。治療には新鮮な血液を輸血するしかない。調べたら、幸美ちゃんも血液型は何百人に一人という「Rhマイナス」だった。

保健所に協力をお願い、父は、見知らぬ人にお願いに伺った。快く承諾してくれ、父の血液を病院まで運んで調べた。引き合わせということがあったらどうか。幸美ちゃんの血液と適合する同じ型だった。その同じ型の血液の人も指名を感じたのだから。迎えるの車に乗って、遠い奈良の病院までかけてくれた。

輸血した血液は○○○のなに、青白かった幸美ちゃんの頬や唇に、紅がさした。ほつり、幸美ちゃんかづやいた。「お腹が空いた。何か食べたい」

血液は命だった。父は胸が震えた。涙があふれ止まらなかった。名の通り我が子が美しく見えた。その日から幾度か、幸美ちゃんは愛の輸血をもらいながら立ち直り、立ち直りながらも次第に衰弱していった。三歳三月月の日、幸美ちゃんは短い命を終えた。

父は和歌山の南部印南町に明治末から続く肥料商だった。付き合っている人々から後から後から会

「血液について私には悲しい思い出がございまして。今から三十年前……」

今年七十二歳になる岡本崇さんは、穏やかに話し始めた。岡本さんが、三十九歳の年のことであった。可愛い女の赤ちゃんに恵まれた。働き盛りだった父は、幸せに美しくあれと願ひ、「幸美」と名づけた。赤ちゃんは両親の愛をいっぱい受け、すくすくと育った。

幸美ちゃんが二歳になった時のことだった。ほつぽおいたをするようになり、元気に育っていた。ある朝、おむつがビクンに染まっていた。血尿だったらしいが、翌日はもう何ともなく、愛らしく笑っていたので、両親はつい気を許した。あゝ朝、お腹が膨れていることに気づいた。触っていると、

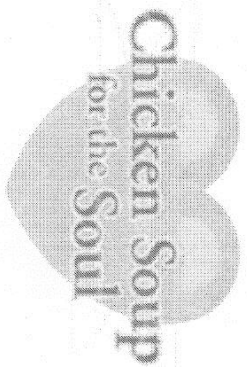
深く愛する者は、忘れるのも運い。

——シャノン十三世紀写本——

「このチキンソープ・ライオンズ編」

構成 香田

血液は命だった



難に訪れた。だれもが、子に先立たれた父母の悲しみの深さを知る人々であった。

思い出しに浮かぶのは、元氣だった日の我が子の笑顔だった。父には、あの輸血の日、赤とよみがえった頬の幸美ちゃんの声忘れられなかった。その日の感謝の思いを、会葬者の志も加えて、血液センターに贈った。父の志は献血を運ぶ車となり、「幸美号」と名づけられた。真つ白なホライ上に赤十字のマークを付けたライオンだった。「幸美号」は、贈られたその日から献血を運んで活躍した。父と母は、その日から自らも献血に参加していった。四年後、御坊ライオンズクラブに協会した父の献血は二十六年間続き、献血本数は百四十八本に及んだ。献血運搬車の寄贈も続けられた。「幸美号」は四号車にまでなつて、近くの田辺血液センターに配備された。父も母もその日の姿に街で出会うことがある。父には、赤色灯を回して走り去るその姿が、幸美ちゃんが励ましてくれていたように見える。

「お父ちゃん、お父ちゃん、まだまだだよ、頑張つてねえ」

「幸美、お前も頑張れよ。氣をつけてな」

心で答える父のまぶたに浮かぶ幸美ちゃんは、幼くふつくと元氣だった。あのころそのままの姿で笑っていた。

「腎臓ウイルスも腫瘍です。小児がんの一つです」

青灰の腫瘍という言葉がある。衝撃であった。この手が、どんな悪いことをしたのだろうか。家族の愛情をいっぱい受けているこの子が、なぜがんなのだ。父も母もそぞろ思つた。家族の不安を打ち消すように医師が言った。

「腫瘍を摘出すれば、元氣になりますよ」

医師の言葉を信じた。幸美ちゃんは、左腎臓摘出の手術を受けて退院した。元氣だった。医師の言葉通りだった。だが、それはつかの間の日差しでしかなかった。病腫は転移していた。腹部リンパ腺に再発して再び入院し、抗がん剤を使った治療が行われた。

幸美ちゃんの病状はやが落ち着いたように見え、た薬のせいも入院前より少しやせた幸美ちゃんには、皆が待つ家に帰ってきた。少し大人くなったように思えた。幸美ちゃんを中心に、一家に前のような暮らしが戻ってきた。でもたれも口にはしなかつたが、いつ再発するかしれない不安が一家を覆った。不安が現実となり、幸美ちゃんはずか三五月の間に三度目の入院となった。

父と母に、悲しくつらい日々が過ぎた。放射線治療と抗がん剤投与で、幸美ちゃんは髪の毛が眉

みると、何が同じに輝いた。医師に診せる



333-C地区

千葉ゆうきのライオンズが
貧血にならない身体を作る
驚きの食材を使った料理教室



1月20日、千葉みなと駅に近いホテルポートプラザちほの2階で、千葉ゆうきのライオンズ(岩本朝子会長/23人)が日本赤十字社千葉支部、成田赤十字病院、千葉県赤十字血液センターと主催した「献血女子会SWEET Sッキング!!チヨコッと早いバレンタイン+健康スイーツで献血にGO!」が行われた。この事業は千葉ロッテマリーンズに協力してもらっており、当日はトークショーを兼ねた試食会に内産も投手がゲストで参加することになっていた。球団ホームページなどでもPR

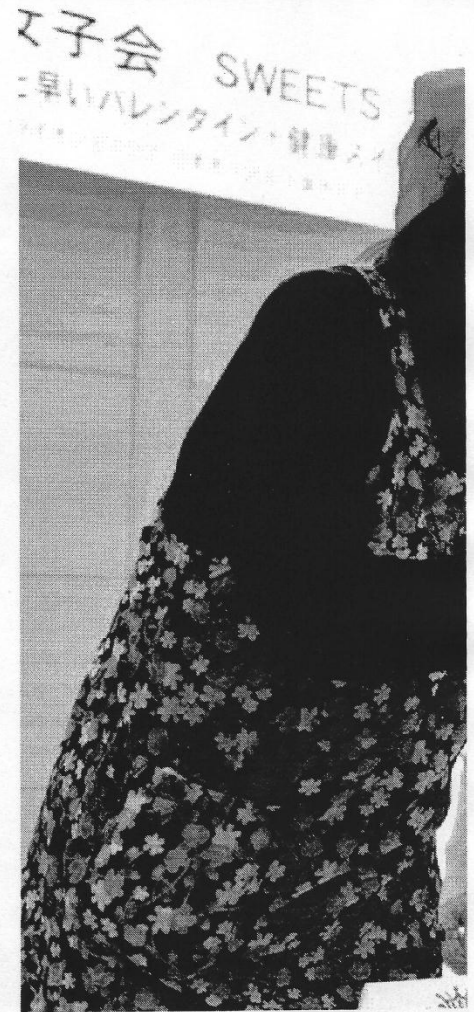
をしてもらっていたため、マリオンズファンの女性も多数応募。定員50人に対し、100人以上の申し込みがあった。

この献血女子会、実はこの日に献血をするわけではない。献血出来る健康な身体を作るためのお菓子作り教室だ。

千葉ゆうきのライオンズは結成当初から献血協力をしてきた。だが、ある問題に心を痛めていた。それは、献血したいと申し出てくれた人から採血出来ないケースが多いことだ。千葉県赤十字血液センターによると、千葉県内で献血に参加してくれ



(上) 千葉ロッテマリーンズの内竜也投手は、参加者との記念撮影などで交流
(下) 参加者が記念撮影をしている間はライオンズのメンバーが料理の番



分たちで調理をスター
 分た
 者
 作
 を
 交
 エ
 プ
 高
 説
 明
 を
 交
 作
 者
 が
 真
 剣
 に
 見
 て
 いた。
 そ
 し
 て
 い
 い
 よ、
 自
 分
 たち
 で
 調
 理
 を
 ス
 タ
 ー



る人は2012年度で約30万4千人。が、5万1千人が献血出来ないという。一番の原因は、低ヘモグロビン量。一般に貧血と呼ばれる症状だ。献血が出来ない原因の約半数を占めており、特に若い女性に多く見られる。そんな中、持ち上がったのがこの献血女子会。チャリティー・ディナーショーの獲得資金で実施された。

当日、参加者はグループごとに作業をする。この日のメニューはチョコレートケーキとクレープ。一見、普通の料理教室のように感じられるが、テーブルの上には卵やチョコレートに混じってひじきやゴボウが置いてある。これらを使うことで体内に鉄分を取り入れられ、貧血に強い身体が作れるという。

実演はホテルポートプラザちばのパティシエ高橋健治さん。説明を交えながら手際よく作っていく姿を、参加者は時折メモを取りながら真剣に見ていた。

そしていよいよ、自分たちで調理をスタート。参加者たちはレシピを基に協力して作り上げていく。次第にこの日初めて会った人同士にもコミュニケーションが生まれていった。途中、内竜也投手がサブライズで登場するなど、終始参加者の笑顔が絶えない料理教室となった。

千葉ゆうきのライオンズでは今後もこの事業を継続していくつもりだ。人々のライフスタイルが変わってきている中、ライオンズクラブならではの方法で健康な身体作りの手伝いをしたいと考えている。

(取材/井原一樹 撮影/関根則夫)

334-D地区

富山東ライオンズクラブ

献血イメージアップ オリジナル献血推進曲の制作



富山東ライオンズクラブ(37人)は1月13日、買い物客でにぎわうショッピングセンター「ファボーレ」内で献血イメージアップ及び推進活動を実施した。事業の目的は若年層の献血離れによる慢性的な血液不足解消をアピールすると共に、当クラブの活動を広く知ってもらうこと。

今年度、当クラブはオリジナル献血推進ミュージックCDを製作した。これは県内のミュージシャンが集結し、リレー方式で歌い上げたもの。

当日はこのCDを献血のPR

に活用してもらえよう、富山県赤十字血液センターへ500枚贈呈した。また、参加ミュージシャンへの感謝状贈呈や、ライブコンサート、そして来場者先着100人へのCDプレゼントなどを行い、同時にライオンズクラブ活動への理解を呼び掛けるチラシを全員で配布した。これらの活動によって献血に対するイメージが明るいものになったのではないだろうか。

CDは全国の血液センターに贈られることになった。今後、全国の献血活動でこのイメージ

ソングを大いに活用して頂くことで、献血に協力してくれる方が増えればうれしい。

また、今回のイベントによって富山東ライオンズクラブの活動のみならず、ライオンズクラブに対して、今まで以上に市民の方に理解を深めて頂けたなら幸せだ。

後日、県内ラジオ放送局から「今お薦めの歌」としてこの歌を流したい、という連絡があった。この歌が永く愛されていくことを心から願っている。

(会長)柳瀬敏

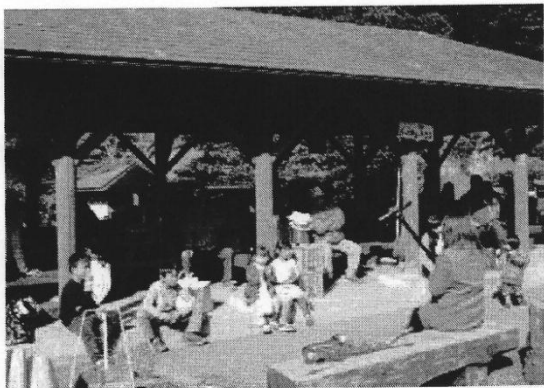
2013年11月23日、都城ライオンズクラブ(持水忠志会長、34人)は紅葉例会を実施した。これは家族親睦例会として計画。家族会員を含めて三世代でウォーキングをし、親睦を深めた。

ライオンズクラブの活動には家族の理解と協力が欠かせない。そこで年に2回家族親睦例会を計画し、内容も工夫を凝らした。うっすらと霜が降りる冷たい朝だったが、1歳から73歳までの三世代が参加。小川のせせらぎを聞き、コケむした石と紅葉を見ると、日頃の疲れが癒やさ

337-B地区

宮崎県・都城ライオンズクラブ

三世代紅葉ウォーキング例会 内容充実で会員増強を目指す



れるようだった。それぞれの体力にに応じて1〜2時間を歩き、昼はバーベキューを行った。費用はほとんどが会員ドネーションによるものだ。

遊具がたくさんある広場では汗びっしょりで飛び回る子どもたち。それを見守る会員は父親や祖父の顔だった。最後には会員の知人が三味線を演奏してくださるなど、アットホームな雰囲気で大変盛り上がった。

講師を呼んで会員増強の勉強会をするのも一つの方法だが、息が詰まるような例会になって

しまつては逆に出席が減り、退会へつながってしまう。都合で来られなかった方が残念がるような例会になれば成功だと考え、この親睦例会では「ぜひ次は自分も参加しよう」と思えるようなものを心掛けていく。

12月には都城市交通少年団と飲酒運転根絶運動、ガールスカウトと歳末助け合い活動を実施した。当クラブでは家族を連れて気軽にボランティア活動に参加出来るようなライオンズクラブを目指している。

(計画委員長)江藤博明

334-A地区

愛知県・津島ライオンズクラブ

「特別じゃない 私はふつう」
佐野有美さん大いに語り歌う!



2012年12月9日、津島ライオンズクラブ(69人)は青少年健全育成事業の一環で「佐野有美さん講演とミニライブ」を主催した。1100人のお客さんが詰めかけ、津島市文化会館ホール前には長蛇の列が出来た。愛知県出身の佐野有美さんは先天性四肢欠損症で、あるのは短い左足と3本の指のみ。しかし彼女は豊川高校でチアリーダー部に所属し「車椅子のチアリーダー」として注目されたのを始め、あらゆる分野で活躍した。そんな彼女を取り上げた

テレビ番組を見ていた石井利一会長と私は、逆境に負けず果敢に生きる有美さんと、献身的なご両親の姿、そして多くの友達との友情にいたく感動した。そしてこの感動を多くの人々と分かち合いたいと講演をお願いした。オープニングは友情出演の清林館高校チアリーダーイングチームが華麗な演技を披露。その後、特別な電動椅子で登場した明るく可愛らしい笑顔の有美さんには、会場から割れんばかりの拍手が送られた。生と死と闘った22年間を、有美さんは明るい笑

顔で語られ、会場からは笑い、時折すすり泣く声があふれた。次は日本レコード大賞企画賞に輝いた有美さんのミニライブ。その澄みきった歌声が会場に響き渡った。清林館高校チアリーダーの有美さんを囲んでのエンディングに観客は総立ちだった。「ありがとう、良かったよ」「勇気をもらいました」と、会場を後にする人々の声に、今期最大のアクティビティを成し遂げた充実感か、見送りに立つ石井会長の日ほ心なしか潤んでいた。

(幹事/長尾昌和)

宇都宮ライオンズクラブ(菅谷文利会長/27人)は今年度、52年日の活動に入った。そこで昨年末の活動を歴史を交えて原稿にすることとした。

2012年10月6日には栃木県立衛生福祉大学において「献血支援」を実施した。当クラブの献血支援活動は1981年に行った市内ライオンズクラブ合同献血会に始まる。その後、献血事業をスタートさせ、30年が経過した。86年には市内のオリオン通りに常設の献血ルームが開設され、当クラブはその前で



333-B地区

栃木県・宇都宮ライオンズクラブ

我がクラブの奉仕活動

48年間継続している。県内のライオンズクラブでは当クラブが唯一実施しているもので、栃木県知事から表彰状も頂いた。10月27日には「第10回うつのみやふれあいスポーツ大会」を後援した。この大会は障害者の方を中心としたスポーツ大会で、今年は956人が参加した。当クラブでは参加者全員にお弁当とお茶を配布提供している。前身の知的障害者スポーツ大会から数えて今回で22回目の継続奉仕である。

(PR情報委員長/坂本竹男)

3月10日、上総ライオンズ（月崎和雄会長／45人）の環境保全委員長である石橋英男を始めとした4人は千葉県旭市を訪問し、加瀬朝彦会長ら3人に出迎えてもらった。旭市は東日本大震災の津波で大きな被害を受けた地域であるため、当クラブからは黒松の苗木50本と支援金5万円を寄贈した。

石橋は「明日の3月11日であの大震災から満2年が経ちます。旭市は津波による被害で海岸の黒松の多くが枯死しました。今日は黒松の苗木を持参しまし

333-C地区

千葉県・上総ライオンズ

東日本大震災被害の旭市に
黒松の苗木50本と支援金寄贈



たので、適した場所に植えてください」とあいさつ。加瀬会長からは「遠方からありがとうございます。頂いた黒松は近く、植樹計画の中で植えさせて頂きます。支援金も頂き、感謝しております」とお礼の言葉があった。この後、昼食をとりながら双方のクラブの運営などについて話し合い、親睦を深めた。

乗用車から見た海岸では、沿線の黒松が津波の影響でかなり枯死しているのが確認出来た。改めて当時の恐ろしさを感じられ、寄贈した苗木が早く活着して大きく育ち、元の防風林のようになることを願った。

寄贈した苗木は3年前の3月、私が松ぼっくりから種子を取り出してまき、育成したもの。元々は植樹をし、地球温暖化防止に役立てようと生育させていたものだったが、震災の復興に使って頂こうと考え、寄贈することにした。

当クラブは東日本大震災の被災地へ数回にわたり支援金を贈っており、一日も早い復興を願っている。（PR情報会報編集委員長 齋藤敏夫）

尼崎レオナ（23人）は2012年の11月から、毎月第3土曜日に献血推進活動を行っている。3月16日にも今期5回目となる献血推進活動を行い、7人が参加した。この日は「けんけつちゃん」の着ぐるみも着用し、道行く人に献血を呼び掛けた。また、今までティッシュや風船を配っていたが、新しい試みとしてスーパボールも配ることにした。着ぐるみの着用や風船、スーパボール配りは子どもの興味を引き、その親御さんに献血を呼び掛けるため行っている。

また、今回は看板も作った。「けんけつちゃん」のイラストに「献血にご協力お願いしますっち」と「けんけつちゃん口調」のメッセージを添えるなど親しみやすいものを作るよう心掛けた。この看板によって多くの人に、より直接的に私たちの訴えを伝えることが出来た。また、パソコンで作成した看板ではなく、手描きのものを使用したことにより、注目されやすく、心の込もった仕上がりになっていると、献血ルームの方にも褒めて頂いた。私たち自身にとって



335-A地区

兵庫県・尼崎レオナ

手書き看板で献血推進活動

も、用意されたものを使うのではなく、自ら作成することで、より献血への意識が高まったと感じている。

第4回目の献血推進活動では、親御さんが献血をされている間子どもを預かるキッズルームで折り紙を教える折り紙教室を実施し、好評だった。しかし、第5回では実施出来なかったため、今後はまた導入していきたいと考えている。このようにこれからも、私たちに出来る献血推進活動を積極的に行っていくつもりだ。

（会長 堤希帆）

335-D地区

兵庫県・加古川東ライオンズクラブ

今期2回目 献血奉仕事業の実施



昨年11月に実施した際は、寒い時期にもかかわらず日標の2万リットルをクリアした。少し暖かくなった今回は、前回以上の献血量を確保したいとの思いでメンバーは集合した。

暖かな土曜日となった3月29日。加古川東ライオンズクラブ（吉島誠一郎会長／19人）の今期2

回目の献血奉仕事業が、イオン加古川店で行われた。400リットル献血のみの実施だった。

準備を済ませたところ、早くも受付に人が並び始めたため、早々に例会を終え、受付を開始

また、献血啓発のティッシュ配りも始めた。朝はつぼみだった桜の花が、午後には開き始めるほどの陽気のせいも、消費税増税直前のセールのおかげか、いつもに比べ買い物客も多く、午前、午後とも献血協力者が途絶えることがなかった。おかげで、当初予定していた受付人数70人をクリア。献血者へのお札に配っていたパンと玉子も買い足すほどだった。午後4時に受付を終了。最終的な受付人数は79人、採血者数61人。確保量は、2万4400リットルとなった。

この事業を通して感じることは、若い人の献血が少ないこと。今回のように実施が400リットル献血のみとなると、体重の条件があることも要因の一つと考えることも出来るだろう。しかし、少しでも献血に関心をもち意識する若い人が増えれば、更に多くの方の命が助かると思う。献血奉仕事業の実施だけではなく、献血に協力する気持ちを広めることもライオンズクラブとしての大切な役目の一つと感じた1日だった。

（幹事／北野砂恵子）

富山ライオンズクラブ（松本臣市会長／75人）は、2006年度に334-D地区第1部第1回の合同アクティビティでスタートしたカンボジアの子どもたちにランドセルを送る事業を続けている。現在は当クラブ単独で実施しており、8年間継続している。今年5月に集積検品後に輸送した1980個を含め、これまでにカンボジアに送ったランドセルは1万1千個を超えた。パートナークラブのフロンペン・オーバイコーンライオンズクラブの協力で、フロンペン郊外の小学校

334-D地区

富山ライオンズクラブ

合同事業から単独事業へ カンボジアにランドセル寄贈



やアンコールワット近くの小学校など10校以上に寄贈している。初めは、富山市内にある60の小学校それぞれを訪問し、説明をし、集積していた。だが、現在は、小学校から問い合わせがくるほど認知され、地元メディアにも大きく取り上げられる事業になった。

この事業は、祖父母や親からプレゼントされ、大切に使ったランドセルを何かに役立てられないかと考えたことから始まった。小学校を卒業する子どもたちの思いと一緒に、学用品がほとんど支給されない国の子どもたちに届けている。カンボジアでは小学生一人当たりの政府からの支援はわずか年1・5ドル。学校建設や学用品の支給など日本を始めとした他国からの支援が無ければ教育環境が整わない状況である。今後もこの事業を継続し、物の支援だけではなく、日本の小学生とカンボジアの小学生との「心の交流」の一翼を担うことが出来れば、と考えている。

（カンボジアへランドセルを贈る委員会委員長 門前昌志）